

唯物論と社会統計学

山田 満（高崎商科短期大学）

要約

アジア太平洋戦争後日本の社会統計学の諸論議の多くは、その哲学的基礎に 哲学的唯物論を思い出してきた（；少なくとも我々は、そう教えられてきた）。この哲学的唯物論は、社会統計学においては、結局のところ「認識の対象反映性」という観念に帰着したのであり、戦後社会統計学の理論的源泉となった蜷川統計学の諸理論（集団論、大量観察論およびその代用論、統計の信頼性・正確性論、統計の社会的性質論、数理的統計解析論）は「認識の対象反映性」という観念に主導されて読まれ、構築されてきた。しかし、「認識の対象反映性」という観念（思想）は、認識活動に絶対的固定点（＝絶対参照枠）を設ける思考であり、歴史のある時期には、固定した基地から体制的思想や流行思想を「批判可能」にするなど、安易な体制・大勢への迎合に向う思想傾向を戒める（「正しい」）働きをもったが、傾向としては、思考活動を一定の形に押込め、思考の多方向への発展を阻害し、思考の袋小路と独断論の微睡み（まどろみ）に社会統計学を追込む働きをもった。言説形式としての哲学的唯物論は、（哲学的）観念論の一変種（「観念論の偽装形式としての唯物論」F. Navarro）に過ぎなかったのである。G・バシュラールから用語を借用すれば、「認識の対象反映性」という観念は最終審において「認識論的障害物」として機能したのであり、「認識の対象反映性」という観念から解放された社会統計学の理論を作ることが必要である。

（注：）ガストン・バシュラール（Gaston Bachelard: 1884-1962）：現代フランス科学認識論・科学史の基礎を築き、現代思想（科学）における構造論的転換を導いた。主著に『ノンの哲学』『新しい科学的精神』『科学的精神の形成』『適用された合理論』『合理的唯物論』『火の精神分析』など。カンギュレム、アルチュセル、セール、フーコーらは彼の生徒である。cf. John Lechte (1994) *Fifty Key Contemporary Thinkers: From Structuralism to Postmodernity*, Routledge, London.

1. 唯物論とは何か

「唯物論」については、定まった定義はないが、例えば、科学哲学の権威あるリーディングス *The Philosophy of science*, edited by R. Boyd et al., The MIT Press, Cambridge(MA), 1991 の巻末用語解説では次のように定義されている：「存在するすべてのものは物質である、あるいは物質に依存する、と宣言する存在論的ドクトリン。」

しかし、戦後日本の社会統計学の歴史的コンテキストから考えれば、マルクスの名に結びついた「唯物論」が問題である：「われわれがそこから出発する諸前提は、けっして手あたり次第のものでもなければ、教条でもない。それは空想のなかでしか無視しえないような現実的諸前提である。それは現実的諸個人（したがって一定の物質的な、そして彼らの思うとおりににはならない諸制限、諸前提、諸条件のもとで活動している姿での諸個人）であり、彼らの行為と彼らの物質的生活諸条件である。」「諸観念、諸表象、意識の生産は、先ず最初は直接に人間の物質的活動と物質的交通という現実生活の言語にのみこまれている。人間の表象作用、思考、精神的交通は、ここではまたかれらの物質的活動態度の直接的流出物である。」「天上から地上に下降するドイツの哲学とはまったく反対に、ここでは地上から天上への上昇がおこなわれる。...現実の活動する人間たちに出発点がおかれ、かつかれらの現実的な生活過程の側から、この生活過程のイデオロギー的な反映と反響の発展もまた解明される。...彼らの物質的生産と物質的交通とを発展させる人間たちが、こうした彼らの現実とともに、彼らの思考活動とこの思考活動の所産とをも変革するのである。意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する。」カール・マルクス『ドイツ・イデオロギー：第一章』から、訳文は花崎阜平によるが、但し、引用文の一部は山田が編集。

また、哲学は「理論における戦闘」であると言いつつアルチュセールは次のように書く：「観念論的哲学者（un philosophe idéaliste）とは、前もって知っている者のようなもの、彼が乗る列車がどこから出発し、どこに行くのかを、始発駅がどこで、終着駅がどこを知っている人間のようなものである。これに対し、唯物論者（Le matérialiste）とは、その列車がどこから来て、どこへ行くのかを知ることなしに、走行中の列車（世界の成り行き、歴史の成り行き、人生の成り行き）に飛び乗る者のことである。彼（マテリアリスト）は偶然に出会わせた列車に乗り、そこで客車の内装を事実として見だし、どのような乗客に取り囲まれ、彼らがどのような会話をし、どのような思想を語り、彼らの社会的環境によって特徴付けられたどのような言語を話しているのかを事実として発見するのである。これらのことすべてが、私にとって、スピノザの思惟のなかに透し模様様に刻み込まれているようなのだ。」Louis Althusser, *Fragments de L'avenir dure longtemp: 1. Spinoza* (1985). 訳文は山田。

2 . 唯物論的認識論

観念論：「哲学は我々の眼前にいつも開かれているこの壮大な書物、つまり宇宙、のなかに記されています。けれどもそこに書いてある言葉を選び、文字を習得しておかなければ理解することはできません。この書物は、数学の言葉と...幾何学図形の文字で書かれています。」ガリレオ・ガリレイ『偽金鑑識官』、他に『1615年6月クリスティーナ大公妃宛て手紙』を参照、訳文は高橋準二による。山田によるコメント：ここで「哲学」とは、（科学的）真理・科学法則のことだと考えてよい。宇宙（自然）は「大文字の書物」である、なぜなら、それは神の御言葉によって創造されたものだから。だとすれば、聖書 = 大文字の書物には、二つのものがあることになる：自然という書物と教会の教義書としての聖書と。ここで、「神/自然」を「物質」に、教会の聖書を「正しい社会科学の理論」に置換えれば「反映模写論的認識論（=認識の対象反映論）」が出来上がる。

唯物論：科学的実践とは「直感と表象を概念へと変形する」（マルクス）過程である。「科学は、その諸対象にたいして厳密な解釈を与える活動ではない。科学は、諸対象を変形し、それらにそれらが初めには所持していなかった意義（une signification）を与える実践なのである。落下する物体の運動のなかには重力の法則を支えるどのような召命も含まれていないし、このような法則に従わなければならないという召命も含まれていない。物体は今も昔も落下しているが、この法則を言表（言語で表明）することなどないのだ。この法則を生産するのは知的活動（le savoir）の使命なのである。この法則は落下する物体のなかに在るのではなく、その傍らに、全く別種の領土、科学的知の領土の上に出現するのである。すべての経験論（的認識論）の失敗が生まれるのは、この地点からである。経験論は、世界は沈黙しているというのに、経験から教えを引き出そうとし、「世界の寓話」を聴取り、引き出そうとするのだから。もはや日常慣習的ではなく、理論的であるこうした変形は、これが適用される実在をそのままにさせておく。この変形は実在を脱現実化するのでも、実在をその諸起源や深層の意味に連戻すのでもなく、実在に新しい次元を付加えるのである。」P. Machrey, *Pour une théorie de la production littéraire*, Maspero, Paris1966.

3 . 社会統計学におけるマテリアリストの観点

「...国民経済計算という言語活動（ランガージュ）はニュートラルではない。それはREPRESENTAIONの体系である。そうである限り、それは表象されたその対象の理論と不可分に一体化している。」J.-C. Delaunay, *Essai marxiste sur la comptabilite nationale*, Editions sociales, Paris, 1975, p.19. 訳文は山田による。

「国民経済計算は、簿記（会計）の枠内での国民経済の包括的かつ詳細な数字で示された表象である。ここで国民経済計算は表象（REPRESENTAION）であるということが強調されなくてはならない。しばしば、国民経済計算は客観的であり、現実（THE REAL）の写真であると言われるのを聞くが、それは少なくとも次のことを忘れて

いる。同じ対象に関して、沢山の写真があり、それらは異なったアングル、照明によって種々なのである。（山田のコメント：この論議は敵の土俵での論議で危ない；なぜなら、「ある対象が既にあり、それを見る視点が様々ある」という凡庸な見方だからだ；そこでピリオウは次のように書く。）それは、とりわけ次のことを忘れていている。国民経済計算が表象する対象は、既にそこにあるもの（デジャ・ラ；所与）なのではないということである。それは国民経済計算自体によって構築されたものなのである。この意味で、国民経済計算は「客観主義的な」観点を持ち得ない。国民経済計算は経済的な「所与の事実」の集成物ではないのだ。国民経済計算は、「構築主義的な」議論の進め方の上に打ち立てられている。それは、経済的なリアリティーを対象へと構築するのである。実際、国民経済計算は、理論的な諸考察と実践的な諸関心の合流点で構築される歴史的生産物なのである。」Jean-Paul Piriou, *La comptabilite national, nouvelle edition*, coll.<Reperes 57>, Editions La Decouverte, Paris, 1991, p.4. 訳文は山田による。

4．社会統計学におけるトランスフォーメーション

< 以下省略 >